

Hi, friends! における「文化」の指導について：
言語指導における文化体験をコミュニケーション能力につなげる

黒 澤 純 子

愛知東邦大学

Hi, friends! における「文化」の指導について： 言語指導における文化体験をコミュニケーション能力につなげる

黒澤純子

目次

1. はじめに
2. 言語学習における文化認識の重要性
3. 分析するにあたっての枠組み
4. *Hi, friends!* 1 と *Hi, friends!* 2 の分析
5. ディスカッション：文化体験をコミュニケーション能力につなげる重要な要素
6. おわりに

1. はじめに

文部科学省（以下、文科省）は2013年12月13日付けで、「英語教育改革実施計画」を発表し、その具体的な教育方針を「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」で示した（文部科学省、2013年）。現在小学校で総合学習の枠組みの中で行われている英語活動が、今後教科化されるにあたって、指導の根幹となる教員研修、指導要領、教科書、評価などについての具体的な内容が審議されていくであろう。2020年の英語の教科としての本格実施までの7年間、あるいは2018年までの5年間の移行期間まで授業をどのように行っていくのか。当然現行の指導要領の目標に沿い、*Hi, friends!* を使用しながら担任教師、あるいは担任教師とALTとのチーム・ティーチングの形態を続けていくものと考えられるが、この期間を、どのように教科としての英語の指導につなげていくのか。今後の小学校での英語教育は、中学での目標である、「身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図ることができる能力を養う」（文部科学省、2013年）ための土台作りとして進められなくてはならない大切な期間と言えるであろう。

本稿では、コミュニケーションを図るためには、外国語活動の目標にある文化体験が言語体験や学習をする上で不可欠なものとする。そして、言語の学習と文化についての関係、そして文化について学ぶことが言語の学習をする際いかに重要かを考えていきたい。次に、2012年から使用されている *Hi, friends!* の中で他国の文化について学習する時、どのような国について、またどのような要素が盛り込まれているのかを関係しているレッスン内の学習項目別に分析を行う。その上で、文科省が目標としているコミュニケーション能力を養っていく上で必要となる要素を挙

げ、今後の指導ための提案をしたい。

2. 言語学習における文化認識の重要性

文科省は外国語活動の目標を「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」（文部科学省、2008、p.7）としている。*Hi, friends!*というテキストを使用しながら、文化という大きく漠然とした概念を児童たちにどのように学ばせ、体験的に理解させるのかは大きな課題であろう。

では、文科省はなぜ文化理解を指導目標に掲げているのだろうか。それは文化理解が言語学習につながる重要な要素と考えているからであろう。最近の研究では、外国語の指導とその言語が話されている文化について教えることは必要不可欠な関係であることに焦点を当てている (Byram, Morgan, & Colleagues, 1994)。また、互いに異文化に属する人間が意思疎通を図ろうとする時、言葉の背景にあるお互いの文化の知識があれば、より円滑の相互理解が可能である。第二言語を学ぶ時、いかに文化理解が重要かを表しているSteele (1990) の主張を以下に引用する。

Every word, every expression we use has a cultural dimension. Culture is the means by which a community communicates. If people were not referring to a commonly agreed upon set of meanings in their interactions with each other, no communication would take place. ... It stands to reason, then, that learning a second (or additional) language, without learning about and understanding the culture(s) in which it is used, will not enable an individual to communicate effectively with speakers of that language. (p. 3)

文化について学ぶこと、理解することなしで、その言語を話す人々と効果的に意思疎通を図ることは不可能だと述べている。さらに、Abdollahi-Guilani, Yasin, Hua, & Aghaei (2012) は外国語として英語を学ぶ時、学習者が言葉の背景にあり、言葉と切り離すことができない文化について知らないならば、その言語を学ぶことは意味がないと言っている。

Without the study of culture, teaching the target language is incomplete. Language study seems senseless to the learners of English as a foreign language (EFL) if they know nothing about the people who speak the target language or the country in which the language is spoken. (p. 115)

同様に、Byram (1989), Littlewood (1981), Wringe (1989) とも、文化について学ぶことは言語を学ぶことの一部であり、また言語を学ぶことは文化について学ぶことであると述べている。

では、文化という大きな概念の中で、学習者は具体的に何を学ばばよいのだろうか。Rueda &

Stillman (2012) は文化を大きく二つに分けている。一つ目は、芸術、音楽、科学、文化的な施設などの社会的業績とするもの。二つ目は、日々の生活様式、社会環境と関係する文化的な習慣としている。またCortazzi & Jin (1999) は、芸術のような文化的産物、学ぼうとする言語が話されている国の歴史や地理、習慣などが含まれると述べ、文化を以下のように定義している。“the framework of assumptions, ideas, and beliefs that are used to interpret other people’s actions, words, and patterns of thinking” (p. 197). つまり、他の人々の行動、言葉、思考形態を理解するための想定、着想、思考の枠組みを文化としている。本稿では、上記で述べられているすべての要素を含む大きなひと纏まりを文化と考えていく。

では外国語活動はどのように文化について学んでいくのだろうか。文科省が掲げている外国語活動の目標を再び確認すると、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」(文部科学省、2008、p. 7) である。さらに、目標を念頭に置き詳しく書かれている「内容」(文部科学省、2008、p. 9) の項目の中から文化の学習に関する事項を以下に記す。

(2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。

(3) 異なる文化を持つ人々との交流を体験し、文化等に対する理解を深めること。

(3) に関しては、解説にもあるように(文部科学省、2008、p. 12)、ネイティブ・スピーカーのALT、あるいは地域に住む外国人の方と接することで異文化理解を体験することができるだろう。では、(2) の項目はどのように指導されているのだろうか。外国とは具体的にどこの国について学ぶのか。どのような学習項目を学ぶことで、多様なものの見方や考え方があることに気付かせようとしているのか、現在授業で実質的に教科書として使用されている *Hi, friends!* でそれらの内容を検証していく。

3. 分析するにあたっての枠組み

Hi, friends! の分析にあたり、本稿では2つの枠組みから分析を行う。まず、異文化を学ぶにあたって、どの国について学ぼうとしているのかを、Kachru (1985) の主張する “three concentric circles” (同心の円) : Inner circle (内円)、Outer circle (外円)、Expanding circle (拡大円) で分類する。Kachru (1985) は、英語が広まっている様子を、その広がり、習得の種類、機能しうる領域に基づいて上記の3つの円の型に分類した。まずInner circleとは、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドで母国語として英語を使用している国々のグループとする。次にOuter circleとは、フィリピン、ナイジェリアなど、植民地とされた歴史的な背景

により、公式言語として英語を話しているグループとする。シンガポールのように、政治、法律、教育において英語が必要な言語となっている国、またインドのように英語が準公式言語で、学ばなくてはならない言語の一つとされている国々も含み、Outer circleにおいては、英語が第二言語となっている。最後に、Expanding circleとは、中国、韓国、日本、台湾、ロシア、ギリシャ、サウジアラビアのようなアジア、ヨーロッパ、中東の国々など、外国語として英語を使用する国々のグループと定義している。昨今、英語を話す人口が増え、Expanding circleがInner circleに近づく勢いであるという指摘もある (Seidlhofer, 2003) が、ここではKachruの分類に基づき分析を行う。この分類の枠組みを使用する理由は、他国、あるいは異文化を学ぶに時、英語を母国語として使用している国々だけについて言及されているのか。又は、第二言語や第二外国語として英語を使用し、学んでいる国々についても言及されているのかを見るためである。

次に、テキストにおける異文化について学ぶ項目を分類するにあたり、2つの枠組みは、Shin, Eslami, & Chen (2011) による分類を援用する。Levels of cultural presentation (文化の表象のカテゴリー) の枠組みの中で、*Hi, friends!* の学習の内容がknowledge-orientedか、あるいはcommunication-orientedの内容になっているのかを見ていく。Shin, Eslami, & Chen (2011) によると、knowledge-orientedの内容とは、学習者が自国の文化に遭遇した場合、その文化についての知識を得るための内容としている。例えば、国の地図上の場所や歴史的な建造物等を認識し、それらについて説明できること、さらに異文化における様々な情報得ること。また、異文化における日常生活の中での挨拶の仕方や非言語コミュニケーションであるジェスチャーを理解することなどを含んでいる。一方、communication-orientedの内容とは、学習者がコミュニケーションのスキルをのばしていくための内容、あるいは学習者が文化間の理解を深めていく内容とし、自分の属する文化と異文化の類似点と相違点を説明できることなども含まれる。communication-orientedの内容では、knowledge-orientedの内容と異なり、より高度で深い洞察力と発信力が必要である。本稿での分析は、Shin, Eslami, & Chen (2011) らの用語を使用するが、内容はRamírez (1995) の使用している用語で、前者は‘culture as information’、後者は‘culture as process’と同義である。なお、この分類の枠組みを使用する理由は、学習の内容が文科省の目標をしている「コミュニケーション能力の素地を養う」(文部科学省、2008) ことにつながる内容になっているかを見るためである。

本稿ではリサーチ・クエスションは2つある。まず一つ目は、*Hi, friends!* 1と*Hi, friends!* 2における文化と関わる内容のレッスンを学ぶ時、Kachru (1985) の主張するどのcircleと関係しているのかを分類し、英語を母国語としている国だけにとどまっているのか。あるいは、公用語や第二外国語をして使用されている国々についてもバランス良く言及されているのかを見ていくことである。二つ目は、テキスト中のレッスンの文化的な内容に関わる時、その学習内容がknowledge-orientedの内容なのか、あるいはcommunication-orientedの内容なのかを分類し、その結果を見極めることである。しかし、外国語活動は現在総合学習の枠内にあり、教科ではないこと、そのため週1時間という授業時間である。また、実質上教科書として使用している*Hi,*

friends! のページ数は少なく、レッスンの項目が文化的な内容に関わる割合を算出するには難しく、十分な分析とは言えないが、上記の枠組みに沿って関わっている項目をチェックするという分析を行うことで、テキストの特徴がわかるのではないかと仮定する。また分析に制限があるものの、何らかの特徴を見出すことによって、今後の課題と指導の方向性が見えてくるものと考えられる。

4. *Hi, friends!* 1 と *Hi, friends!* 2 の分析

このセクションでは *Hi, friends!* 1 と *Hi, friends!* 2 の分析を行う。分析に当たって、前述した Kachru (1985) と Shin, Eslami, & Chen (2011) による 2 種類の分類項目を適用する。また、分析対象の *Hi, friends!* 1 と *Hi, friends!* 2 では、テキスト内において異文化の要素が含まれているレッスン、他国について、またその国の文化に言及しているレッスンだけを選択する。

まず、5年生対象の *Hi, friends!* 1 (全部で9レッスン) の内容を見ていく。テキストの構成は、レッスンごとに Let's Listen、Let's Play、Let's Sing、Let's Chant、Activity の活動から成っている。Let's Sing は Lesson 2 で一度あるだけである。異文化、あるいは外国について言及されるレッスンは 1、3、8、9 の 4 レッスンである。以下、どのような活動になっているのかをレッスンごとに見ていく。

Lesson 1 の Let's Listen 2 のセクションでは、11 か国 (フィンランド、フランス、ケニア、インド、ロシア、中国、韓国、日本、オーストラリア、アメリカ、ブラジル) のあいさつ (こんにちは) を聞く活動となっている。加えて、国名と国旗、地図、そしてその国の代表となる名所、料理、スポーツが掲載されていて、それらがヒントにもなっている。このレッスン 1 においては、世界には数々の言語があることを認識する内容になっている。

Lesson 3 の Let's Listen のセクションでは、6 か国 (中国、アメリカ、日本、フランス、韓国、スペイン) の数字の言い方を聞く (スペインはレッスン 1 ではでてきていない国) レッスンとなっている。

Lesson 8 の Let's Listen 2 のセクションでは、オーストラリア、韓国、中国の学校生活を聞いて、わかったことをメモするリスニング中心のレッスンとなっている。

Lesson 9 の Activity 2 では、アメリカ、スウェーデン、韓国、インドの給食について聞き取りをして、絵にある給食と一致させるレッスンとなっている。

以上の 4 つのレッスンの内容を表にする (表 1)。各レッスン別に該当する項目の枠内にチェックマーク、“✓” を入れている。まず、three concentric circles の項目から見ると、Inner circle, Outer circle, Expanding circle に属する国についてほぼバランスよく表れていることがわかる。また、Levels of cultural presentation (文化の表象のカテゴリー) においては、レッスン中の活動が knowledge-oriented の内容にかたよっており、Lesson 9 の Activity 2 で初めて communication-oriented の内容に属していることがわかる。Lesson 1、Lesson 3、Lesson 8 では Let's Listen が学習項目で

あるため、異文化に属する登場人物たちの「こんにちは」の挨拶、1から10までの数、学校生活の話の聞き取ることだけに留まっている。

表 1

Hi, friends! 1 の分析（5年生対象：全部で9レッスン）

	Types of three concentric circles			Levels of cultural presentation	
	Inner circle	Outer circle	Expanding circle	Knowledge-oriented	Communication-oriented
Lesson 1: Let's Listen 2	✓	✓	✓		
Lesson 3: Let's Listen	✓		✓	✓	
Lesson 8: Let's Listen 2	✓		✓	✓	
Lesson 9: Activity 2	✓	✓	✓		✓

次に、6年生対象の*Hi, friends!* 2（全部で8レッスン）の内容を見ていく。テキストの構成は、*Hi, friends!* 1と同様に、レッスンごとにLet's Listen、Let's Play、Let's Sing、Let's Chant、Activityの活動から成っているが、*Hi, friends!* 2ではLet's Singの活動はない。*Hi, friends!* 2において、異文化、あるいは外国について言及されるレッスンは2、5、6の3レッスンである。以下、どのような活動になっているのかをレッスンごとに見ていく。

Lesson 2のLet's Play 1で日本の行事とその行事が行われる月名とを結び付ける学習をする。その後、Let's Listen 1では、タイの新年の祭り（水かけ祭り）、韓国の入学式、オーストラリアの夏のクリスマス、アメリカのハロウィーンの4つの行事とその行事が行われる月を12か月の中から選び、結びつける学習をする。

Lesson 5では、Let's Play 1とLet's Play 2、Let's Listen 1が連動して一つの大きな活動になっている。10か国（アメリカ、インド、フランス、日本、中国、オーストラリア、エジプト、ブラジル、ギリシャ、スペイン）の国旗を見て、国名を書く（Let's Play 1）。加えて、アメリカの自由の女神、インドのタージマハール、フランスのモンサンミッシェル、日本の清水寺、中国の万里の長城、オーストラリアのエアーズロック、エジプトのピラミッド、ブラジルのイグアス国立公園の滝の写真を見ながら、どの国の世界遺産かをリスニング問題として解答する（Let's Play 2）。Let's Listen 1では、国旗の色とその特徴を聴き取り、国名を答える活動である。

さらに、Let's Listen 2では、フランスの国旗を確認し、リスニングの問題（わかったことを書こう）に答える。ヒントとしてエッフェル塔、お城、エスカルゴの写真が掲載されている。同様に、Activityではおすすめの国をSakuraとHikaruが紹介する。前者がおすすめの国を紹介する時、万里の長城、パンダ、餃子の写真を使用する。後者は、エアーズロック、コアラ、クリケットの

写真を利用する。

Lesson 6のLet's Listen 3のセクションでは、世界中の8つの都市名を地図上で確認し、その都市における時刻と人々がしている行動とを一致させる活動である。出てくる都市は、東京、シドニー、北京、モスクワ、ロンドン、サン・パウロ、ニューヨーク、バンクーバーである。

表 2

Hi, friends! 2の分析（6年生対象：全部で8レッスン）

	Types of three concentric circles			Levels of cultural presentation	
	Inner circle	Outer circle	Expanding circle	Knowledge-oriented	Communication-oriented
Lesson 2: Let's Play 1 & Let's Listen 1	✓		✓	✓	
Lesson 5: Let's Play 1 & 2, Let's Listen 1	✓	✓	✓	✓	✓
Lesson 6: Let's Listen 3	✓		✓	✓	

表2から、three concentric circlesの項目を見ると、Inner circle, Outer circle, Expanding circleに属する国について、テキストではほぼバランスよく言及していることがわかる。また、Levels of cultural presentationの枠組みにおいては、knowledge-orientedの内容に留まっていることがわかる。6年生の児童は中学に進級するにあたり、世界の国々についての基礎的な知識も必要であるため、knowledge-orientedの内容を中心とした項目は必要である。しかし可能ならば、さらに踏み込んだ内容にし、中学の英語につなげていくためのcommunication-orientedの内容にまで及ぶ活動まで広げることが理想である。例えば、*Hi, friends!* 2のLesson 5のActivityではテキスト内の登場人物たちが中国とオーストラリアを紹介する、というリスニングの学習が中心である。ここで児童たちが写真などを提示し、日本について紹介する活動まで行い、communication-orientedの内容にまでもっていくことは可能かもしれない。

5. ディスカッション：文化体験をコミュニケーション能力につなげる重要な要素

以上の分析結果を確認し、児童たちが異文化を認識し、体験することからコミュニケーション能力につなげるための今後の指針を考えたい。前述したように、コミュニケーション能力をつけるための一つの要素として文化に対する意識を高めること、また異文化を認識し、自分の属する文化との比較をし、異文化を理解することは重要である。文化について学ぶことなしに言語を学ぶことは不完全な状態である（Abdollahi-Guilani, Yasin, Hua & Aghaei, 2012; Byram, 1989;

Littlewood, 1981; Wringe, 1989) と主張している研究者は少なくない。さらに、Samovar, Porter, & Jain (1981) は文化について学ぶことはコミュニケーションの基礎であると述べている。今後は今以上に日本の文化と外国の文化についての学習項目をより多くテキストに導入することは重要であろう。そうすることにより、文科省が外国語活動の目標としている内容、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に親しみせながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」(文部科学省、2008) こと、加えて2013年に発表した「グローバル化に対応した新たな英語教育の目標」において小学生の目標として再度掲げている「コミュニケーション能力の素地を養う」ことから、さらに中学生においては「身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図ることができる能力を養う」(文部科学省、2013) という目標につながっていくであろう。

では、児童たちが文化の認識をして、コミュニケーションにつなげていくための異文化についての学習とはどのような項目が考えられるだろうか。ここでは、具体的に児童たちが興味を持つ可能性があり、かつ重要な要素を入れた項目を大きく5つに分ける。

- 1) 学習する国の場所を地理的に確認する。知的、視覚的な興味をひきつけるために国旗や首都、さらにその国の気候などにも言及する。
- 2) 学ぼうとする国の歴史や有名な建造物に言及する。5年生からは日本の歴史を学び始めるので、日本の歴史と関連付けながら学べるよう配慮できるとよいだろう。また、建造物や記念碑などは図鑑やネット上からの写真などの資料を教師が示すと、視覚で確認でき、より理解しやすいであろう。
- 3) 日本と学ぼうとする国における日常生活習慣の違いを学ぶ。例えば、身近な日常の食べ物、食べ方(箸、フォークやナイフ、手を使う)などを学ぶ。国によっては食事をする時テーブルにつかず、床に座って食事をする国もあることを知る。日本の公立小学校では給食があるが、欧米では学校給食ではなく、お弁当を持参する学校が多いことを学ぶ。例えば、5年生の使用している *Hi, friends!* 1, Lesson 9のActivity 2では、アメリカ、スウェーデン、韓国、インドの給食について聞き取をし、挿絵も掲載されている。給食の内容の違いについて新しい知識を得る場となっているため、児童たちの積極的な活動になるよう、指導者が児童たちに質問をしながらディスカッションなども取り入れるとよいだろう。また、日本のお弁当の認識とは多分に違う海外のお弁当(ランチ)の中に入れるものを自由課題として児童に調べさせてみる。文化の違いにより、日本と様々な相違点があることを認識する機会を設け、さらに発表の形式を取ることも可能であろう。
- 4) 日本で認識されているジェスチャーと学ぼうとする国にジェスチャーとの類似点、相違点を調べて比較する。
- 5) 学ぼうとする国の文化における児童文学、民話などを取り入れ、日本のそれらと比較する。

以上の5点は大まかではあるが基本的な項目である。これらがバランスよく学べる機会や時間をとることは児童たちにとって文化について学び、体験することにつながるであろう。バトラー

後藤（2005）は、英語活動では「ハロウィーンやクリスマスなど各国の行事を体験したり、ステレオタイプ化した文化知識を断片的に提示する程度にとどまっているケースが多く、国際間の軋轢や異文化の遭遇によって起こる様々な功罪について、深く考えたり、意見を交換させたりするような内容（またはそういった内容への意識を高める下地を作ること）にはつながっていない」（p. 240）と指摘している。現行の年間35回の授業の中では上記の（3）から（5）に当たる内容や、バトラー後藤の指摘していることを改善していく物理的な余地はなかったであろう。しかし、今後英語活動の時間が週3回に増え、加えてモジュールに時間が加わることで、児童たちが思考し、みんなで議論する下地を作れるような、さらに充実した授業へと変わっていくことが期待できる。

そのためにも最後に、異文化を学ぶにあたってもう一つ重要な項目を挙げたい。言語が話されている国で実際に使われている実物（レアリア：authentic materials）を利用することである。Peck（1998）、Ramírez（1995）、Wringe（1989）らはレアリア、‘from-life’ materials（Richards & Rodgers, 2001, p. 170）を利用することの重要性を述べている。これから学ぼうとする国、その文化に対するイメージを高めるために、児童たちに本物に触れさせることが重要なのである。

具体的なレアリアとしては、スーパーのチラシは手に入りやすいだろう（参考資料1と2）。例えば、外国資本で日本に進出しているスーパーは児童にとっても馴染み深いので、可能ならばそれらのスーパーのチラシを調達し、日本のチラシと比較する活動なども興味深い。参考資料の1と2のようなチラシのコピーを準備し、実際に現地で売っている食品や日用品の種類を見て、自分たちのよく行くスーパーで売っている商品との類似点と相違点を考えたり、さらに値段の比較や量、チラシのレイアウトや色彩など日本のスーパーのチラシとの比較をすることで異文化体験をすることが可能だろう。また、商品の値段を見て、学習する国の通貨を学んだり、その通貨で商品の計算をする活動まで進めていくことも児童たちにとって楽しい学習となるであろう。

6. おわりに

Kramersch（1993）は、コミュニケーション能力をつけるためには文化についての知識を得ることの重要性を述べている。同時に、文化の多様性、可変性ゆえに起こりうる文化についての学習の難しさをも指摘している。

Where it has encountered difficulties is in the teaching of culture: for culture is difference, variability, and always a potential source of conflict when one culture enters into contact with another. ... It [Culture] is always in the background, right from day one, ready to unsettle the good language learners when they expect it least, making evident the limitations of their hard-won communicative competence, challenging their ability to make sense of the world around them. (p. 1)

教員は、段階を経て児童たちに文化に対する認識を芽生えさせること、児童たちが外国や外国文化により興味を持つように良い刺激を与えることは重要である。前頁で述べた児童たちが興味を持つ可能性があり、かつ重要な要素を入れた6項目以外にも、教員は様々な道具と手段を利用して指導していく必要がある。外国語教育は今後教科化され、学習時間も現行の35時間から三倍の時間数に増える予定（文部科学省、2013年）だが、外国語活動の授業が、児童たちの「コミュニケーション能力の素地を養い」ながら、「読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う」（文部科学省、2013年）という目標に近づけるよう努力しなければならない。そのためには、教員は児童たちの知的好奇心を高めるための手助けになるような指導が理想であろう。そして教員の自主的な研究や教員向けの研修は不可欠である。さらに重要なことは、すべてを学校任せにするのではなく、家庭においても児童たちが異文化に対する興味や自国の文化や伝統への関心を抱くような工夫をし、親子で話し合えるような環境作りも大切である。児童たちが文化理解を深め、コミュニケーション能力を養うための土台作りのために、学校、家庭、コミュニティーの中で支えながら手助けしていくことは重要であろう。

引用文献

- Abdollahi-Guilani, M., Yasin, M. S. M., Hua, T. K., & Aghaei, K. (2012). Culture-integrated teaching for the enhancement of EFL learner tolerance. *Asian Social Science*, 8(6), 115-120.
- Byram, M. (1989). *Cultural studies in foreign language education*. Clevedon, UK.: Multilingual Matters Ltd.
- Byram, M., Morgan, C., & Colleagues. (1994). *Teaching-and-learning language-and-culture*. Clevedon, UK.: Multilingual Matters Ltd.
- Cortazzi, M., & Jin, L. (1999). Cultural mirrors: Materials and methods in the EFL classroom. In E. Hinkel (Ed.), *Culture in second language teaching* (pp. 196-219). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kramsch, C. (1993). *Context and culture in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk & H. Widdowson (Eds.), *English in the world : Teaching and learning the language and literature*. (pp. 11-32). London: Longman.
- Littlewood, W. (1981). *Communicative language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Peck, D. (1998). *Teaching culture: Beyond language*. Yale: New Haven Teachers Institute.
- Ramírez, A. G. (1995). *Creating contexts for second language acquisition: Theory and methods*. Longman: New York.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (2001). *Approaches and methods in language teaching*. (2nd ed.) New York: Cambridge University Press.
- Rueda, R., & Stillman, J. (2012). The 21st century teacher: A cultural perspective. *Journal of Teacher Education*, 245-253. DOI: 10.1177/0022487112446511
- Samovar, L., Porter, R., & Jain, N. (1981). *Understanding intercultural communication*. Belmont, CA: Wadsworth.
- Seidlhofer, B. (2003). *A concept of international English and related issues: From 'real English' to 'realistic English'*. Strasbourg: Council of Europe.
<http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/source/seidlhoferen.pdf> より採取

- Shin, J., Eslami, Z., & Chen, Wen-Chun. (2011). Presentation of local and international culture in current international English-language teaching textbooks. *Language, Culture and Curriculum*, 24(3), 253-268.
- Steele, R. (1990). Culture in the foreign language classroom. *ERIC/CLL News Bulletin*, 14(1), 3-5.
- Wringe, C. (1989). *The effective teaching of modern languages*. London: Longman.
- バトラー後藤裕子 (2005) 『日本の小学校英語を考える：アジアの視点からの検証と提言』東京：三省堂
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社
- 文部科学省 (2013) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm より採取

受理日 平成26年3月26日

quick meal ideas savings

Tribe Hummus
Selected 227g
On Sale 2 FOR \$5

Deli Salads
Twice Baked Potato, Bonanza Bean or Pesto Pasta Selected 900g
On Sale 6⁹⁹ Each
Bonus Points 40

Flatbread Pizza
Vegetariano, Roasted Chicken Spinach & Feta, Italian Sausage with Basil Marinara or Buffalo Chicken with Blue Cheese Crumble 665-680g
On Sale 8⁹⁹ Each
Bonus Points 75

Barbecue Chicken Legs
Random Weight
On Sale 99¢ Each
pick BC

Cheesy Crab Dip
or Seafood Dip 275g
On Sale 4⁹⁹ Each
Bonus Points 25

fresh sushi Made fresh daily in-store.

California Roll
White Rice
On Sale 4⁹⁹ Each

Vegetable Combo
White Rice
4⁶⁹ Each

Rainbow Roll
10⁴⁹ Each

Real Crab Roll
7⁹⁹ Each

6

bakery savings

<p>Raisin or Cheese Scones Made in-store. 6 Pack</p>  <p>On Sale 349 Each</p> <p>Bonus Points 25</p>	<p>Apple Pie 10" 1.1 kg</p>  <p>On Sale 899 Each</p> <p>Bonus Points 50</p>
<p>Chocolate Brownies 8" x 8" 580g</p>  <p>On Sale 399 Each</p> <p>Bonus Points 25</p>	<p>Garlic Bread Made in-store. 454g</p>  <p>On Sale 269 Each</p> <p>Bonus Points 25</p>
<p>Cinnamon Buns All Varieties Available with cream cheese icing. 6 Pack</p>  <p>On Sale 369 Each</p> <p>Bonus Points 25</p>	<p>Dessert Cups 142g</p>  <p>On Sale 229 Each</p>
<p>Portuguese Buns White or 100% Whole Wheat 8 Pack</p>  <p>On Sale 229 Each</p>	<p>Sponge Cake 240g</p>  <p>On Sale 329 Each</p>
<p>Lemon Meringue Pie Made in-store 700g, 8"</p>  <p>On Sale 499 Each</p>	